

ローラン、トリスタン、ペルスヴァル

——中世ヨーロッパの英雄の3つの顔——

フィリップ・ヴァルテール
渡 邊 浩 司 訳

訳者前書き

本稿は、2008年10月30日と31日に、フランス南東部の都市ニースにあるルイ・ニュセラ（Louis Nucéra）図書館内の公会堂で開催された「ヨーロッパのアイデンティティーをめぐる第3回会談—ヨーロッパのアイデンティティーにおける英雄」（III^e Entretiens autour de l'identité européenne : Le Héros dans l'identité européenne）で、中世フランス文学を専門とするフィリップ・ヴァルテール（Philippe Walter）氏が行った報告の邦訳である。本稿の眼目は、中世ヨーロッパの英雄モデルとしてローラン、トリスタン、ペルスヴァルの3人を取り上げ、それぞれの独創性を明らかにするところにある。フランス語によるこの報告原稿は、2009年12月に刊行された篠田知和基編『神話・象徴・言語Ⅱ』（楽瑯書院）21-36ページに掲載された。訳文中に〔 〕を挟んで補った注は、訳者が追加したものである。

はじめに

中世期の英雄に、「ヨーロッパ」モデルというものは存在するのだろうか？ この問いに対して網羅的に答えるためには、中世ヨーロッパの英雄

モデルを、たとえばアジアの英雄モデルと比較してみる必要がある（同じ中世期にヨーロッパと同じような文学伝承を持っていた文明が、比較対象として適当だろう）。しかしこうした作業は、開始直後に本論の限られた枠をはみ出してしまうと考えられる。だが、中世ヨーロッパにはかなり根源的な文化的傾向がいくつか想定可能なことから、英雄的^{ヒロイズム}精神の1つのモデルを認めることができる。それは比較的安定し整合性のとれたモデルであり、ヨーロッパの想像^{イマジネール}世界に定着して残っていくものである。その例証として、フランス、ドイツ、イタリア、大ブリテン、スペインといったヨーロッパ諸国に属しているという特性を持つ3人の英雄を検討してみたい。

ローラン (Roland) がその名前だけでゲルマン起源だと分かるのに対し、トリスタン (Tristan) とペルスヴァル (Perceval) はイギリス諸島の出身である。トリスタンとペルスヴァルの物語は、ケルト文化圏 (ウェールズやアイルランド) での長きにわたる口頭伝承を経て、12世紀後半にフランス語で書き留められたものである¹⁾。

『トリスタン物語』²⁾は、1160年頃にベルールによってフランス語で著された。この作品は、ドイツの物語作家アイルハルト・フォン・オーベルクにより (1170年頃、ザクセン州のブラウンシュヴァイクの宮廷で) 翻案されている。またフランス語による同じ作品の別バージョンにあたるトマ作『トリスタン物語』は、ゴットフリート・フォン・シュトラースブ

1) こうした起源をめぐる問題については、以下の2冊の拙著を参照されたい (*Perceval, le pêcheur et le graal*, Paris, Imago, 2004 および *Tristan et Yseut. Le porcher et la truie*, Paris, Imago, 2006)。

2) フィリップ・ヴァルテールとダニエル・ラクロワが刊行した便利な校訂本には、『トリスタン物語』の中世フランス語版全体と古アイスランド語による『トリストラムとイーセンドのサガ』が収録されている (*Tristan et Yseut, Les poèmes français. La saga norroise*, éd. par Ph. Walter et D. Lacroix, Paris, Livre de poche, Lettres gothiques, 1989)。

ルクにより（1200年から1210年頃に）ドイツ語に翻案された。『トリスタン物語』にはアイスランド語版（修道士ローベルトが1226年に著した『トリストラムとイーセンドのサガ』）や13世紀の英語版（『サー・トリストレム』）も存在する。13世紀末のイタリア語版（リッカルディアアーノ版『トリスタン』）、スペイン語版（『レオニスのトリスタン』）、15世紀の英語版（トマス・マロリー作『アーサーの死』の中の「サー・トリストラムの物語」）は、トリスタンのヨーロッパでの経歴を補う物語群である³⁾。

ペルスヴァルは、クレティアン・ド・トロワの遺作（『グラアルの物語』、1180年頃⁴⁾）に初めて登場する。この作品からすぐにドイツ語の翻案（ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ『パルチヴァール』、1201年～1205年頃）、中期ネーデルランド語の翻案（『ペルシェファエル』、13世紀前半）、アイスランド語の翻案（『パルセヴァルのサガ』、13世紀）、英語の翻案（『ガレスのサー・ペルシヴェル』、14世紀前半）が生まれ、その後イタリア語、スペイン語、ポルトガル語にも翻案された。

ローランは1100年頃に成立したフランスの武勲詩の1つ（『ローランの歌』）に登場する⁵⁾。それはオックスフォード本と呼ばれる有名な版である（オックスフォードの図書館が所蔵する写本に収録されているため、この名で呼ばれている）。またイタリアにも『ローランの歌』の別バージョンがいくつか見つか、いずれも純然たるフランス語で書かれている。ドイツ語版（1230年頃にデア・シュトリッカーが著した『カール』

3) *Tristan et Yseut, mythe européen et mythe mondial*, éd. par D. Buschinger (actes du colloque d'Amiens 1986), Göppingen, 1987.

4) Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard (Pléiade), 1994. 『グラアルの物語』の校訂と現代フランス語訳は、ダニエル・ポワリヨン (Daniel Poirion) による。

5) 『ローランの歌』の最良の校訂本（現代フランス語つき）は、ジェラルド・モワニエによるもので、複数の版を重ねている (G. Moignet, *La Chanson de Roland*, Texte original et traduction, Paris, Bordas, 1969)。

と、14世紀冒頭に著された『カールマイネット』)や、スペイン語版(14世紀の『ロンセスバリエス』)⁶⁾、イタリア語版(『ロッタ・ディ・ロンチスヴァッレ』)も存在する。

まず、以上の概観から指摘できるのは、ローラン、トリスタン、ペルスヴァルの3人がヨーロッパ全域でよく知られた人物だということである。この3人の物語をヨーロッパ大陸の主要言語で読むことができるのは、ヨーロッパという枠内で初めて中世文学が本当に理解できるからである。この時代の文学の流行は、フランスが発信地となっていたことが多く、ヨーロッパ全域に広がっていった⁷⁾。しかしフランスもまた、その多くが別の地域(たとえば大ブリテン)に由来する伝説と神話の素材を受け継いできた。クレティアン・ド・トロワはある物語のプロローグ⁸⁾で、ギリシアやローマを経て今では《フランス》が全世界的な文化の継承地であり、フランスの英雄モデルを世界中に知らしめていると述べている。こうした英雄モデルをやがて、トリスタンやランスロが代表するようになる。
イマジネール
想像世界の次元で特に中世期に特徴的なのは、地中海の英雄モデルが凋落したことと、北方(スカンディナヴィア、ケルト、ゲルマン)の英雄モデルが確立したことである。

ここでまず注意すべきは、(たとえば叙事詩のような)虚構作品が作り出した虚構の英雄と、日常の悲劇が生み出した現実の英雄を混同してはな

6) J. Horrent, *La Chanson de Roland dans les littératures française et espagnole au Moyen Age*, Paris, 1951.

7) 中世期のフランスは、ガロ＝ローマと北欧＝ゲルマンの交流の十字路だった。そのためこれら2つの文化が(相互に)見事に統合され、フランス(＝ゲルマン)＝ケルト＝キリスト教文化が作られた。この点でフランスがヨーロッパで果たした役割は極めて特別なものである。

8) これは『クリジェス』(*Cligès*)のプロローグである。この物語は前掲書・ブレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』(Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*, Paris, Gallimard, 1994)に収録されている(校訂と現代フランス語訳はフィリップ・ヴァルテールによる)。

らないということである⁹⁾。^{イマジネール}想像世界の英雄（ローラン、ベルスヴァル、トリスタン）は、歴史そのものが生み出した英雄（たとえばレジスタンス運動の英雄たち）とまったく同じタイプというわけではない。前者は紙の上の存在（したがって神話）¹⁰⁾であり、後者は血と肉を備えた人間である。しかし、果たして後者が前者なしに存在できるかどうか、自問してみてもよいかもしれない。ミルチャ・エリアーデ〔ルーマニア生まれの宗教史学者、1907年～1986年〕がうまく指摘した通り、ある出来事やある人物が集団の記憶に残るのは、それが元型の中に溶けこむことができた場合に限られる¹¹⁾（ここでは元型を、誰もが認めることのできる価値や理想を備えた、文化上のモデルとして理解する必要がある）。このように、想像上の英雄が現実の英雄よりも先に存在することも多い。^{イマジネール}想像世界の英雄が、現実の英雄を呼び寄せて生み出している。英雄とはまさしく、想像世界とイデオロギーが常に共働する、神話的な作業の賜物なのである¹²⁾。

英雄の叙事詩的な鑄型

中世ヨーロッパの歴史と文化の中で最初の偉大な政治的表現は、カロリング王朝〔751年～987年〕に認められる。すでに当時からシャルルマーニュ〔カール大帝、742年～814年〕は、ある伝記作家によって《ヨー

9) F. Caille, *La figure du sauveur : naissance du citoyen secourer en France (1780-1914)*, Presses universitaires de Rennes, 2006.

10) K. Kérényi, « Naissance du mythe du héros », *Recherches poétiques*, t. 1, Paris, Klincksieck, 1975, pp. 157-172. 英雄の問題については、マルク・オージェの考察も参照（M. Augé, *Génie du paganisme*, Paris, Gallimard, 1982）。

11) M. Eliade, *Le mythe de l'éternel retour. Archétypes et répétitions*, Paris, Gallimard, 1969 [邦訳はミルチャ・エリアーデ（堀一郎訳）『永遠回帰の神話—祖型と反復』未来社、1963年]。

12) P. Centlivres, D. Fabre et alii dir., *La fabrique des héros*, Paris, Editions de la Maison des sciences de l'homme, 1999.

ロッパの父』と呼ばれていた。後にローマ条約〔欧州連合設立のため1957年に調印〕によって定められたヨーロッパは、かつてシャルルマーニュが支配した王国に対応している。（ブリュッセル、ルクセンブルク、ストラスブールという）ヨーロッパの主要都市は3つとも、ロマンス語文化圏とゲルマン語文化圏の中間地帯に位置している。周知の通りこの地帯はカロリング王朝の揺籃地であり、ヨーロッパの複数の大国の^{るつぽ}垣塙であった。

シャルルマーニュが登場する『ローランの歌』は、いわば起源物語の役割を果たしている。この歌が《フランス》という国家¹³⁾の起源物語とみなされるのは、国の伝説的な起源の語り方がいささか西部劇を思わせるからである。作中のローランは《うるわしのフランス》の英雄の1人として登場し、《フランス人たち》はローランのうちに己の姿を認めようとする。だがこうしたフランスのアイデンティティーの出現には、なんら自発的なものはない。中世期にローランが典型的な《フランスの》英雄とみなされていたことを示す手掛かりが何1つないからである。《フランス》という名称も12世紀にはイル＝ド＝フランス地方〔パリ盆地を中心とする地方〕を指し¹⁴⁾、今日我々が知っている六角形のフランス本土を指していたのではない。事実、『ローランの歌』の《民族主義的》解釈は（19世紀以降の）近現代の註釈の産物であり、この作品に含まれると考えられる民族的な諸要素は、時代錯誤的に大げさに解釈されることが多かった¹⁵⁾。現代批評は、文学作品の解釈が時代や環境によってどれほど異なってい

13) この表現はコレット・ボースが『フランスという国家の誕生』(C. Beaune, *Naissance de la nation France*, Paris, Gallimard, 1995) で用いたものである。

14) 今日にも残るロワシー＝アン＝フランス(Roissy-en-France)などの地名を参照（この地名中の「フランス」はイル＝ド＝フランス地方のことである）。

15) B. Cerquiglini, « Roland à Roncevaux ou la trahison des clercs », *Littérature*, 42, mai 1981, pp. 40-56.

るかを明らかにした。過去の作品群の解釈には、我々の現在の関心事が投影されることが多い。我々は過去の作品群の意味を（客観的に作品群から掘り起こす代わりに）「^{ア・ポステリオリ}遡及的に」作り出している。我々はどうして「^{ア・ポステリオリ}遡及的に」、こうした作品群を支える英雄たちのイメージを作り出しているのである。

あらゆる文明の起源には（もちろんヨーロッパもこの規則の例外ではなく）、このように起源物語や起源神話が認められる。そこでは、あるとき混沌から秩序が生じ、混沌とした世界の瓦礫の上に文明が築き上げられていく経緯が語られる。つまり『ローランの歌』で描かれているのは、英雄の死と変容、凋落と再生という原初的なドラマが繰り返される、始原の世界なのである。諸文明はいくつかの基本的なイメージを使って、その礎となった神話的な偉業を表現している。これに相当するのは、超人的な武勇譚、宇宙の諸力を具現する英雄とその敵の対決［たとえば「嵐」を招く英雄と「泉」の番人との対決］、神の起こす奇跡、炎の嵐［のような天変地異］である。初めにあるのは「歴史」であるが、この「歴史」は神話の顔を持っていることが多い。こうした物語群のうちに、それらが実際に伝えているわけではないものを探し求めてはならない。そこで語られているのは、記憶の中で再構成されてはいるものの、歴史以上に真実味のある想像上の世界である。戦闘への熱狂、戦士の狂乱の影、魔剣などを描く『ローランの歌』は、千もの武勲を成し遂げる勇士を壮大な死の宴の中で称えている。中世ヨーロッパの英雄の鋳型は、武勲詩とともに作られていったのである。

『ローランの歌』は、ピレネー山脈の境［ロンスヴォー］で起きた歴史上の出来事を伝えるものだと思っている人もいる。しかし実際はまったく違うことが今日では判明している¹⁶⁾。この物語は、時代錯誤的な要素、創

16) こうした問題の概説については、ルネ・ミュソ＝グーラーの著作を参照

出された人物、わざとらしい状況や不可思議な状況（たとえば太陽がその運行を中断する奇跡）から作られている。傑作の本領は、虚構に過ぎないとはいえその審美的な真理を歴史に認めさせ、歴史を具現するものだと我々に信じこませるところにある（だからといって「虚構」が《嘘》というわけではない。なぜならこうした同じ作品群は、過去の出来事を映し出すのとは別のかたちで歴史を語っているからである）。

叙事詩的な伝説は神話の法則に従って、目立たない歴史上の真実を再構成し、永遠に変わることのないイメージ群に固定する。武勲詩はイメージを好むため、こうした英雄的なイメージ群を読みとらなければならない。武勲詩は好んで創り出したイメージ群に、驚くべき魅惑的な力を与えている。『ローランの歌』でこうしたイメージ群に相当するのは、仲間たちをサラセン軍に買収するガヌロンの裏切り、フランク軍がサラセン軍によって制圧される悲劇的な奇襲、助けを呼ぶために角笛を吹くローラン（しかしすでに手遅れだった）、瀕死のローラン、破壊することのできない剣デュランダル、ローランの亡骸を前にシャルルマーニュが流す涙である。ここには、永遠の刻印をとどめた神話の運命的な瞬間を象った、多くの場面が連なっている。武勲詩は紛れもなく、英雄を創り出す鋳型なのである¹⁷⁾。

ローランと戦争の試練

中世期、ローランはヨーロッパ（ギリシア、ラテン、ケルト、スラヴ、スカンディナヴィア）の古い理想的な英雄像であり、選ばれた戦士像でもあり続けた。しかしそれは、スカンディナヴィアの神話物語群で描かれるような野獣戦士としての姿である。情け容赦のない戦士で、「犬や狼のよ

(R. Mussot-Goulard, *Roncevaux (samedi 15 août 778)*, Paris, Perrin, 2006)。

17) C. Kerbrat, *Leçon littéraire sur l'héroïsme*, Paris, P.U.F., 2000.

うに粗暴で、熊や雄牛のように強い。人間たちを虐殺し、鉄や銅も物ともしない。この状態は《熊の皮をまとった戦士（バルセルク）の狂乱》と呼ばれる」と、この崇高な戦士の理想像をスカンディナヴィアの神話物語は端的に述べている¹⁸⁾。周知の通り、ヨーロッパの英雄は何よりもまず、集団や個人での戦いで己の存在を見せつける。戦士の狂乱が表しているのは、度を過ぎた暴力、執拗なまでの殺戮、戦闘機械と化した姿である¹⁹⁾。

しかしながら、ローランは単なる《うるわしのフランス》の英雄ではない。ローランが最初に登場するのは確かにフランス語で書かれた作品であるが、数多くの中世研究者が力説してきたように、ローランの名はむしろゲルマン起源である。ローラン (Roland) という名は、「名誉」(hruot) の「国土」(land) を指しているに違いない²⁰⁾。ここで理解すべきなのは、防御や征服の対象となる土地の重要性である。ローランの名誉の称号は、彼が征服した国々の数に相当する（『ローランの歌』の第 172 レース²¹⁾）。ローランが今わの際に見せるしぐさは意義深いものである。緑なす草の上にうつぶせに伏し、スペインの方へ頭を向ける。ローランはシャルルとその臣下たち全員に、自分が戦いの勝者として亡くなったと言ってくれるよう望む（第 174 レース）。これこそがまさに彼の名の意味すると

18) G. Dumézil, *Mythes et dieux des Germains*, Paris, Leroux, 1939, p. 81 [邦訳はジョルジュ・デュメジル（松村一男訳）『ゲルマン人の神話と神々』（『デュメジル・コレクション 2』ちくま文庫、2001 年、所収）]。

19) Norman Daniel, *Héros et Sarrasins : une interprétation de la chanson de geste*, Paris, Cerf, 2001.

20) 古高ドイツ語 hruod (《栄光》) は、ゴート語では hrod (「勝利の」) となる。《勝利の》や《栄誉ある》という語義は、古代から 6 世紀頃までのゲルマン人を形容するものだった。M. Gottschald, *Deutsche Namenkunde. Unsere Familiennamen*, 5^e éd. procurée par R. Schützeichel, Berlin, New York, 1982, pp. 260-261.

21) 「レース」(laisse) とは、叙事詩を構成する節（語りの基本単位）にほかならない。

ころである。この所作は、英雄の死のみならず、こうした英雄的^{ヒロイズム}精神の拠り所となるさまざまな価値をも象徴している。エミール・バンヴェニスト [フランスの言語学者、1902 年～ 1976 年] は、その重要な特徴を次のように復元してみせた。

祖先信仰によって結びつき、耕作と牧畜で生計を立てる《大家族》の家父長的構造。聖職者、戦士、農夫からなる社会の貴族的スタイル。征服欲と所有者のいない場所への関心（中略）。いつも後からやってくるものの、全員が出自を同じくする侵略者によって土地が専有されることは、このように柔軟で同化可能な政治組織を作るのに必要な諸条件を創り出す²²⁾。

こうした行動様式を支配する法的な概念を一言で述べるとすれば、「生地主義」と呼ぶのがふさわしいだろう。歴史的に見れば、「生地主義」と「血統主義」という 2 つの概念は、国籍の取得が問題になる場合にいつも競合していた。中世には「生地主義」が優勢だった。長きにわたり、アンシャン・レジーム期 [1789 年のフランス革命前の絶対君主政の時期] でもなお、フランスで生まれフランスに住む子供なら誰であれ、フランス国民となる前に実際には町民、村民、司教区民といったより狭い共同体の一員だったとしても、その子供はフランス《生まれ》とされた。このように「生地主義」に好意的だった長期にわたる中世という時代的背景を考慮すれば、『ローランの歌』に土地や母なる大地が現れるのは驚くにあたらない。また中世には、追放（母なる大地から引き離されること）は極刑とみなされていた。

22) *Revue de synthèse, Synthèse historique*, 1939, p. 18. Extrait cité par J. Haudry, *Les indo-européens*, p. 125.

ローランの物語はおそらく、ゲルマンの歌謡に由来する。フランスの中世研究者ガストン・パリシ〔1839年～1903年〕は、ゲルマンの歌謡が武勲詩の直接の典拠であると考えた。武勲詩の起源の問題は、この上なく難解である。それでも今日明らかなと思われるのは、武勲詩がさらに来歴の古い神話伝承を受け継いでいるという事実である。武勲詩が伝えるのは、古ヨーロッパの神話群の実態である。著名な神話学者ジョルジュ・デュメジル（1898年～1986年）²³⁾は、こうしたヨーロッパの戦士神話を研究した。デュメジルは、英雄戦士が（祭司＝王と農夫＝牧夫とともに）インド＝ヨーロッパ語族の想像世界^{イマジネール}の3本柱の一角を占めていたこと、さらには概して英雄戦士が犠牲となる呪いが英雄のたどる悲劇的な運命を説明することを、次のように力説した。「たとえ神であっても、戦士はその本性により罪にさらされている。その機能により、万人の幸せのために、戦士はさまざまな罪を犯さざるをえない」²⁴⁾。デュメジルは、ローマ世界、ゲルマン世界、スカンディナヴィア世界に伝わる神話物語群を博捜することで、この説の傍証を固めた。

ヨーロッパの英雄の起源は、古代や中世の叙事詩の中に見つかる。英雄はまず戦いで頭角を現す。英雄の伝統的な定義で強調されているのは、目覚ましい武勲、勇気、力強い性格、才気あふれる行動、大義への献身である。英雄が守るのは、己の出自を象徴する法、秩序、家門、土地、国家で

23) H. Coutau-Bégaire, *L'œuvre de Georges Dumézil. Catalogue raisonné*, Economica, 1998.

24) G. Dumézil, *Heur et malheur du guerrier*, Flammarion, 1985, p. 127 [邦訳はジョルジュ・デュメジル（高橋秀雄・伊藤忠夫訳）『戦士の幸と不幸』（『デュメジル・コレクション4』ちくま文庫、2001年、所収）]。2008年10月末にニースで開催された「ヨーロッパのアイデンティティーをめぐる第3回会談」では、アラン・ド・ブノワ（Alain de Benoist）が「英雄の罪」についての報告を行った（« Georges Dumézil, les limites de l'héroïsme et le péché du guerrier »）。

ある。このことから、英雄には集団のアイデンティティーを象徴する側面が強く担わされると考えられる。英雄の姿には、1つの人間集団さらには1つの社会全体が映し出されている（フランク人にとってはローラン、ゲルマン人にとってはジークフリート、スペイン人にとってはル・シッドがこうした英雄にあたる）。英雄に対置されるのは二枚舌の裏切り者であり、無気力、俗悪、虚栄心を露呈する。中世に特有のこうした対立は、英雄的精神を表す形容語で表現される。「勇ましい」（‘proz’）、「誠実な」（‘leial’）、「立派な」（‘gent’）、「名門の」（‘de bon’aire’）、「賢い」（‘sage’）、「高貴な」（‘franc’）といった数多くの形容語が、武勲詩では執拗に繰り返される。英雄は目覚ましい武勲と寛容に根差した態度により、その名をとどろかせる。英雄はまた、倫理的なだけでなく美的でもある偉大さを手にするのである。

「ローランは剛く、オリヴィエは賢し」と、『ローランの歌』の有名な詩行が述べている〔第 87 レース〕。この詩行が実際に強調しているのは、^{ヒロイズム}英雄的精神の2つの姿である。1つは戦術に長けた聡明な姿（オリヴィエ）であり、もう1つは粗野かつ暴力的で、極端に走る姿（ローラン）である。しかしこの2つの姿はほぼ同じ結末を招く。英雄は何よりも死を約束され、死に捧げられる存在だからである。英雄の価値とその行動の意味は、英雄が立ち向かうこうした死との関係で定義される。敵との戦いを通して英雄が挑むのは常に死であり、この死のみが英雄の臨む戦いに意味を授けてくれる。ローランは《意志の英雄》²⁵⁾なのである。

叙事詩的な英雄というイデオロギーの構築にはさらに、聖人伝との明らかな関係が存在する²⁶⁾。（『聖女ウーラーの続謡』や『聖アレクシス伝』

25) L. S. Crist, « Roland, héros du vouloir », dans : *Mélanges Wathelet-Willem*, Liège, 1978, pp. 77-101.

26) J. Le Goff, *Héros du Moyen Age, le saint et le roi*, Paris, Gallimard, 2004.

といった) フランス語による最初期の文学は、(実に古いジャンルの1つである) 聖人伝のかたちで登場した。武勲詩が英雄に与えている犠牲のイメージは、厳密に言えば宗教的ではなく、さまざまな側面を持っている。ローランは自らを犠牲にする。苦しみに立ち向かおうとする殉教者のように、忍従して戦いを受け入れる。しかもローランは己の血を神と王に捧げる。叙事詩的な英雄は、聖人に備わる美德を世俗的な次元に移し替えている²⁷⁾。しかし、英雄を突き動かす原動力には曖昧さがつきまとう。

古代の英雄と中世の英雄には、明らかな違いがある。古代の英雄が(ホメロス作『イリアス』のように) 予め運命づけられた存在として神々に操られるのに対し、中世の英雄にはいくらかの自由意志が残されている。中世の英雄には《罪惡》と呼ばれる影の部分もあり、英雄に悲劇的な気高さを授けている。[ローランの提案でシャルルマーニュ軍からの使者としてサラセン軍に派遣された] ガヌロンはローランに復讐しようと、サラセン人と共謀してローランに罠を仕掛けた。しかしガヌロンにだけ非があるわけではなく、ローランにも己の悲劇的結末についての責任がある。この責任はそれ自体が《無節操》と結びついている。これはヨーロッパではアキレウスの「怒り(ヒュプリス)」まで遡ることのできる、鍵になる概念である([トロイア戦争での] ギリシア軍の勝利を台無しにしかねなかったアガ멤ノンに対するアキレウスの怒りは、『イリアス』の中核部分である)。サラセン軍との戦いの最前線にいたローランは、慢心と一徹さのせいで無分別な行動を起こしてしまう。なぜなら慢心は常に、英雄が本質的に持っている罪だからである。慢心はしばしば、英雄が味わう挫折の原因にさえなる。ローランの部隊がサラセン軍によって制圧されたとき、ローランは角笛を吹いて援軍を呼ぶことを拒む。敵軍の撃破を確信していたか

27) M. Sheler, *Le saint, le génie et le héros*, trad. E. Marmy, Lyon-Paris, 1958 (ドイツ語による原著は1933年に刊行)。

らである。しかし彼の軍全体が減ばされ、ようやく彼は角笛を吹くが、時すでに遅しだった。過度の自信と思い上がり、ローランは己の死で償うことになったのである。

このように『ローランの歌』では、模範的かつ罪深き英雄が見せるこうしたパラドックスが繰り返されている。こうした気高さと罪の混交や、己の存在の曖昧さはおそらく、ヨーロッパの英雄像の後の展開を理解する上で重要な鍵である。ローランだけが唯一の例ではない。シャルルマーニュ自身にも、こうした英雄に備わる曖昧さが潜んでいる。中世文学はこぞって、頭目であり至高の裁判官としてのシャルルマーニュの偉大さを称えている。彼は暴力を食い止め、緊張関係を解消することで、己の権力を打ち立てた。しかしまた同時に、己の犯した過ちに苛まれている。中世の伝承では何度も、少なくとも叙事詩的な物語群では、シャルルマーニュが犯した取り返しのつかない罪について取り上げられている。これらの伝承では、シャルルマーニュは妹と近親相姦の罪を犯し、ローランはその交わりから生まれたとされている〔このテーマについては、フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司訳）「シャルルマーニュと妹の近親相姦——中世史に残る《噂》をめぐる解釈学試論——」中央大学『仏語仏文学研究』第44号、2012年、pp. 191-210を参照〕。

トリスタンと恋愛

ドニ・ド・ルージュモン〔スイスの文芸批評家、1906年～1985年〕が『恋愛と西欧』という著名な労作の中で提案した、トリスタン神話の《ヨーロッパ的》解釈は有名である。幸福な恋愛は存在しないというのである。（ロミオとジュリエット、マノン・レスコーなど）ヨーロッパの有名な恋愛物語はすべて悲劇である。西欧は不幸と悲劇的な恋愛というテーマに魅惑されている。恋する英雄が身をもって示すのはいつも、不可能な

幸福である。英雄は人間の完璧な恋愛を盲目的に信じたために破滅へと導かれるが、この信仰は南仏詩人（トルバドゥール）の伝統に由来し、ヨーロッパに典型的なものである。

なぜならトリスタンが身を任せたのは、不可能な恋愛への信仰にはかないからである。こうしたヨーロッパ的症候群こそが、《文明の中の不幸》の原因かもしれない。ドニ・ド・ルージュモンは『恋愛と西欧』の最後で、若き中国人の言葉を引用している。

恋愛という観念は中国には存在しない。「愛する」という動詞は、母親と息子たちとの関係を定義するためにしか使われない。夫は妻を愛することはない。程度の差はあれ「夫は妻に対して愛情を抱く」のである（中略）。ヨーロッパ人の態度は、「これは恋愛だろうか、あるいはそうでないのか？ 僕は本当にこの女性を愛しているのか？ それとも愛情を感じているだけなのか？」と、生涯を通じて自問し続ける。このような態度はすべて、中国の精神科医からすれば、狂気の兆候とみなされかねない²⁸⁾。

ドニ・ド・ルージュモンは、己と敵対することになってしまう「情熱恋愛」の神話を、西欧が発明したと考えている。西欧人は何世紀にもわたって情熱恋愛という幻想の中で生きてきたため、幸福を絶望的に探し求める個人の文明という形態を発展させた。西欧人はまた、ドニ・ド・ルージュモンが《情熱的な力》と呼ぶものに支配された文明を築いた。トリスタンとイゾーの物語も同じく、とりわけ英雄にとっての自殺的な個人主義の形

28) D. de Rougemont, *L'Amour et l'Occident*, Paris, Plon, 1972, p. 358 [邦訳はドニ・ド・ルージュモン（鈴木健郎・川村克己訳）『愛について（上）（下）』平凡社、1993年]。

態が姿を見せたものである。確かに恋人たちは常にこの世では孤独である。しかしトリスタンとイゾーはこの孤独という制約を、情熱的なエゴイズムが命ずるまま、見事なまでに持ち続けている。西欧中世が非社会的なものとみなしたこの恋愛は、社会にとって自殺的かつ破壊的なものである。こうした恋愛は、(生殖行為にではなく) それ自体のうちに正当性を認める。完璧なまでに崇高であるため、それなしでは生きていけぬような恋愛の表現なのである。この恋人たちは、媚薬が契機となって生まれた恋愛のうちに己の存在の礎となりうるような価値を見出すことができず、愛ゆえに亡くなるのである。

コーンウォールの恋人たち〔トリスタンとイゾー〕の悲劇譚において、中世の英雄モデルは魅惑的な主題であり続けた。物語作家たちはこの魔性の恋人たちに魅惑されつつも苛立ちを覚えた。トリスタンとイゾーが人々の共感を得るようになったのは、ヴァーグナー〔ドイツの作曲家、1813年～1883年〕のロマン主義が登場してからのことである。西欧中世は彼らの影を何とか追い払おうと努めた。トリスタンに対置されるのはランスロ〔英語名ランスロット〕である。ランスロにとって恋愛は、完璧な騎士になるための励みであり鼓舞を意味した²⁹⁾。ある有名なエピソードが、ランスロの最も有名な英雄的行為を端的に示している。絶対的な恋愛の対象である王妃グニエヴル〔英語名グウィネヴィア〕を囚われの身から解放するため、ランスロは橋代わりに川の上に架けられていた巨大な剣の刃の上を歩いて渡らなければならない。手足に切り傷を負い、怪我をして血を流しながらも、ランスロはこの試練に成功する。この場面はランスロの英雄的精神を簡潔に示しており、13世紀にはノルマンディー地方のある教

29) J. Ch. Payen, « Lancelot contre Tristan : la conjuration d'un mythe subversif (réflexion sur l'idéologie romanesque au Moyen Age) » dans : *Mélanges Pierre Le Gentil*, Paris, SEDES et CDU, 1973, pp. 617-632.

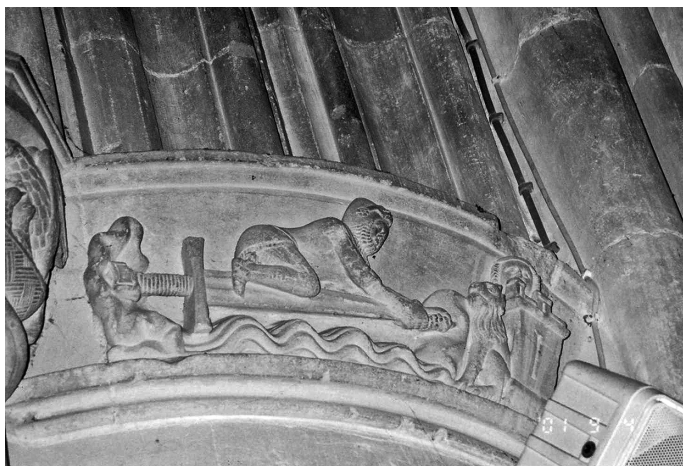


写真1 剣の橋を渡るランスロ（フランス・カン、聖ピエール教会の柱頭彫刻）（撮影 渡邊浩司）

会の柱頭彫刻に描かれた³⁰⁾（写真1）。それはまるで、この世俗の英雄が聖徒の交わりへの参加を許されたかのごとくである。トリスタンが中世の英雄の影の部分象徴しているのに対し、ランスロは光の部分象徴している。そのため西欧中世はランスロに思いをめぐらせ続けたが、そのことは中世だけでなく現代の世界にもあてはまる。

1940年6月、ルイ・アラゴン〔フランスの詩人・小説家、1897年～1982年〕はドルドーニュ地方の小さな町リベラックにいて、「リベラックの教訓、またはフランスのヨーロッパ」³¹⁾を書いている。これは「ドイツ軍を前に」フランス軍が潰走する中、フランスの英雄的^{ヒロイズム}精神の過去の栄光について思いをめぐらせた文章である。アラゴンはヨーロッパの英雄を

30) これはカン（Caen）の聖ピエール教会（12世紀）のことである。「剣の橋を渡るランスロ」は、数多くの写本でも挿絵のかたちで描かれている。

31) この文章は、『エルザの眼』と題する詩集に、付録として収められている（*Les yeux d'Elsa*, Paris, Seghers, 1995, pp. 115-139）。

描く言葉やモデルを見出そうと、中世フランス文学の黄金時代にあたる12世紀に目を向けている。アラゴンによれば、この時期にフランスで生まれた人々は「ヨーロッパ全体の、つまりイタリア、イギリス、ドイツ、スカンディナヴィア、スペイン、ポルトガルの英雄になった。なぜなら当時、12世紀後半に、フランスはヨーロッパに詩の力で侵攻するというあの榮譽、あの大きな誇りを体験したからである。まさしく当時、フランスは初めてヨーロッパのフランスとなった。同じことが18世紀と19世紀にも再び、啓蒙哲学の伝播によって起こるべくして起きたのである。」(p.124)

ヨーロッパ中に浸透していた、こうした英雄の理想像を表すキーワードは、《宮廷風道徳》である。英雄が武勲を果たすのは、大義名分のためである。ローランは《うるわしのフランス》と王[シャルルマーニュ]しか知らず、トリスタンはイゾーのためだけに生き、ランスロは心の中で王妃のことだけを考えていた。英雄にはさらに、大衆と一線を画するようなカリスマが備わっている。道徳的な観点から見ると、英雄は常に名誉心、寛大さ、魂の気高さ、誓約の堅持を示す。ヨーロッパの英雄史の中で、英雄トリスタンは1つの主要な段階を表している。トリスタンを通じて、ヨーロッパの英雄の理想像の中核に女性が新たに招き入れられたからである。

ペルスヴァルと知恵

ペルスヴァルの英雄的な運命は、「グラアル」(Gaal)と呼ばれている。ペルスヴァルの運命は、ローランの見せる戦闘力とも、トリスタンを襲う激しい恋愛ともまったく関連がない。だからと言ってペルスヴァルが勇敢で完璧な騎士でないと言うわけではない。彼はまさしく勇敢で完璧な騎士である。しかしながらペルスヴァルは、どの騎士も経験したことのない類まれな出会いをする。旅の途上で、探し求めていたわけでもないの

に、「グラアル」というオブジェと出会うのである。ペルスヴァルのケースでは、《聖杯（グラアル）の探索》は存在しない。そもそも自分の心のうちに一度として名前も存在も浮かんだことのないオブジェを、どうすれば探しにいけるというのだろうか。ペルスヴァルが目撃する「グラアル」(graal) は「キリストの血を受けた」「聖杯（聖なるグラアル）」(saint Graal) ではなく、宗教的な要素や神秘的な要素を何1つ持ち合わせてもいない。さまざまな作品を取り違えてはならず、クレティアン・ド・トロワが（1180 年頃に）韻文で著した物語の中の「グラアル」を、その 30 年から 40 年後の散文物語群に登場する「聖杯（聖なるグラアル）」と同一視すべきではない。13 世紀にはキリスト教化がかなり進み、異教起源の「グラアル」（食事用の大皿を指す普通名詞）は、キリスト受難の聖遺物である「聖杯」へと変貌を遂げることになるからである。

クレティアン・ド・トロワの作品では、「グラアル」は地上での運命の秘密と深く関わっている。「グラアル」はペルスヴァルが己を省みるよう強く求める。「漁夫王の館で」「グラアル」と「血の滴る槍」が目の前を通過するのを見たペルスヴァルは、「グラアルで誰に給仕するのか?」「なぜ槍は血を流すのか?」という 2 つの質問を正しく発しなければならなかった。出現した光景に驚き、類まれな一連のオブジェを目撃し、その秘密を深く理解しなければならなかった。だがペルスヴァルは口をつぐみ、この世で最大の秘密を前に黙りこんでしまう。比類なきこの英雄は、罪深い沈黙に屈してしまうのである。

イヴ・ボヌフォワ「フランスの詩人・芸術批評家、1923 年～2016 年」がまさに指摘した通り、この場面が示しているのは、この世にある事物の性質や意味よりもその不思議な現前である。すなわち「我々はこの地上で何をしているのか」という問いである。ペルスヴァルが発すべきだった 2 つの質問は、言葉の最も広い意味で、何よりも哲学的かつ霊的なものだった。

答えることよりもむしろ問うことがすでに、概念的思考にとっては名誉である。それはいかなる思考にとっても名誉である。[スフィンクスの謎に「答え」た] オイディプスによって、西欧は悪しき出発をしたのである。(中略)

我々の中のペルスヴァルが自らに問う必要があるのは、「事物や存在とは何か」ではなく、「なぜそれらは我々が自分の場所だと思っている場所にあるのか」「それらは我々の声に対していかに曖昧な答えを用意しているのか」という問いである。我々の中のペルスヴァルは、事物や存在を支えている偶然に驚かねばならず、それらを突如目にしなければならぬだろう。そしてそのことはもちろん、この不確かな知の最初の運動において、それらの事物や存在に宿り、それらを破壊するあの死を、あの無名性を、あの有限性を知ることにほかならない³²⁾。

ここでは手短ながらも、アジアの（特に日本の）文化との比較をぜひとも行っておきたい。日本人にとって、枯山水の技、生け花の技、桜の花見、俳句は、儚きものに備わる秘密を称えるものである。それは秘密をそのまま受け入れ、その内在性と超越性を同時に眺めることである。こうした儚きものや壊れやすきものにこそ、真の秘密とともに人生の隠された意味も宿っている。日本人は瞬間のうちに永遠を、また永遠のうちに瞬間を見ている。世界とそれを覆うベールを同時に受け入れ、それらの現前に身を置くのである。ヨーロッパ人にとっては、このように隠された秘密は耐

32) Y. Bonnefoy, « L'acte et le lieu de la poésie » dans : *Du mouvement et de l'immobilité de Douve*, Gallimard / Poésie, 1970, p. 203. [ボスフォワの第1評論集『ありそうもないこと』(*L'Improbable*) に収録された「詩の行為と場所」という詩論からの引用であるこの箇所については、小倉和子氏（立教大学教授）からご教示を賜りました。ここに特記し感謝申し上げます。]

え難いものである。ペールは剥ぎとらねばならず、見知らぬものに出会えば、それを楽しむ代わりに解決して消し去らなければならない。宇宙のすべてをその末端にいたるまで征服するため、秘密を探るときには常にさらに先へと進まねばならない。何を見つけ出すためなのだろうか？

「グラアル」に出会った後、ペルスヴァルは筆舌に尽くしがたい無気力のようなものに襲われる。物思いにふけり続け、己のうちに閉じこもってしまう。紛れもなく衝撃を受けた彼は、手の施しようのない孤独に陥る。しかし、ほぼ同時に（秘密に通じた伯父の隠者を介して）天地創造に関わる最も重要な秘密を知ることになる。ペルスヴァルがひそかに教えてもらう神の秘密の御名は、知識や知恵の究極の形態である。なぜなら神の御名はそれを知っている人に、力や才能を余すところなく授けてくれるからである。

「グラアル」とは未知の世界の声であり、不確かな期待を表している。こうした期待は「探索」、さらには「^{ケット}征服」と呼ばれるようになる。もはや恋愛と戦争がいずれも人生の目的ではなくなるのなら、征服すべきものとしては何が残されているのだろうか？ それは「認識」を唯一の照準にした場合に見えてくる重要な2つの対象、すなわち己自身と世界である。

戦士〔ローラン〕や臆病な恋人〔トリスタン〕以上に、ペルスヴァルは認識の英雄として名をはせる。12世紀と13世紀の境に、新しい世界が忽然と姿を現す。この世界は、ルーマニアの歴史家リュシアン・ボイア〔1944年生まれ〕が指摘したように、征服という観念を軸にして展開する³³⁾。なぜなら、これこそがヨーロッパ文化の最も強力な動因だからである。ヨーロッパは（地理、経済、科学など）あらゆる形態の征服を試みてきた。何もかも知ろうとしてきたヨーロッパは、現代になると袋小路へ

33) L. Boia, *L'Occident : une interprétation historique*, Paris, Les Belles Lettres, 2007.

入りこんだかのように迷うときもある。世界の贖罪が可能であるという思想は、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ作『パルチヴァール』で示されている（後にヴァーグナーがこの作品をオペラで取り上げる）。ヨーロッパはペルスヴァルによって、絶対的なものや秘密、真理をことごとく（空想の上で）征服するよう求められる「グラアル」の時代に入ったのである。

ヨーロッパとメランコリー

ヨーロッパの英雄モデルの鍵は、少なくともギリシアまで遡る西洋の重要な伝承に見つけることができるだろう。レイモンド・クリバンスキー [イギリスの哲学史家、1905 年～2005 年]、アーウィン・パノフスキー [ドイツ生まれの美術史家、1892 年～1968 年]、フリッツ・ザクスル [ドイツ生まれの美術史家、1890 年～1948 年] の労作（『土星とメランコリー』³⁴⁾）によって、こうした西洋の伝承の構成要素が紹介されている。西欧の有名な英雄すべてにあてはまる運命的な気質があり、その気質を生み出す体液は黒胆汁（ギリシア語では「メランコレー」）と名づけられている。西欧の英雄たちが卓越した才能を発揮して行動することができるのは、彼らの運命が四体液の 1 つによって予め定められているからである。その体液のせいで、英雄たちはまさしく病にかかった。そしてその病は天賦の才だけでなく、同時にとてつもない不幸を呼びこむ力という姿で現れた。これはヨーロッパの天才に本質的に備わる両価性である。

34) *Saturne et la Mélancolie : études historiques et philosophiques : nature, religion, médecine et art* (traduit de l'anglais), Paris, Gallimard, 1989 [邦訳はレイモンド・クリバンスキー、アーウィン・パノフスキー、フリッツ・ザクスル（田中英道監訳）『土星とメランコリー 自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』晶文社、1991 年].

哲学、政治、詩歌、あるいは芸術の分野で並外れたところを見せた人間はすべて憂鬱症であるが、黒胆汁が原因の病気で苦しむほどのひどさだったのはなぜだろうか？ たとえば英雄たちの中では、ヘラクレスの例が挙げられる。事実、言い伝えによると、ヘラクレスはこうした気質の持ち主だった。だからこそ古代人はヘラクレスにちなんで、てんかん患者の発作を「聖なる病」と呼んだのである。また自分の子供たちに対して見せた彼の狂気じみた振舞や、オイテ山で亡くなる前に激しく己の傷を引き裂いたことも、ヘラクレスがこうした気質の持ち主であった証である。なぜなら感情の激しい高ぶりは、黒胆汁が原因で現れることが多いからである。アイアスやベレロポンの物語もこの種のものであり、前者は完全に気が触れ、後者は人里離れた場所しか求めなくなった。後世の人々の中ではエンペドクレス、プラトン、ソクラテスや、その他多くの著名人が同じ運命をたどった。このことは大多数の詩人にもあてはまる。

この一節は、長きにわたってアリストテレス作とされてきた重要なテキスト（『問題集』30・1）からの引用である³⁵⁾。明らかに作者不詳だと考えられるこのテキストでは、医学的見地からヨーロッパの天才について説明されている。英雄とされる人や偉大な芸術家はみな、思想や行動の点からこうした天才特有の病にかかっているか、あるいは取りつかれていると信じられていた。彼らは自ら「メランコリー」の兆候を認めていた。まさしく文化的なこの病を想像上で表すときには、本質的な両価性^{アンビバレンス}が支配的になった（なぜならこれはまさしく避けられない運命を説明しようとする想像上の病であり、黒胆汁なるものは単なる胆汁とは違って、人間のいかな

35) *L'homme de génie et la mélancolie*, traduction de J. Pigeaud, Rivages, 1988.

る組織にもいまだかつて存在したことはないからである)。こうした神話的な両価性によれば、完全な天才には（悪しき狂気も含め）実に過酷な身体的かつ精神的な苦しみがどうしても課される。「メランコリー」の黒い太陽のエンブレムのもとに置かれる、ヨーロッパの^{イマジネール}想像世界が作り上げたすべての英雄やすべての天才の化身を拾い上げようとすれば、そのリストはとても長いものとなるだろう。

この思想はヨーロッパ文化全体に浸透している。ソクラテス〔古代ギリシアの哲学者、前 470 年または 469 年～前 399 年〕は服毒を余儀なくされた。ロマン派の音楽家の中で最大の天才ベートーヴェン〔1770 年～1827 年〕は難聴に見舞われた。近代の予言者の哲学者フリードリッヒ・ニーチェ〔1844 年～1900 年〕は狂気に陥った。ヨーロッパの天才は、宿命的な不運と不離の関係にある。

おわりに

ローラン、トリスタン、ペルスヴァルは、中世ヨーロッパの英雄モデルが作られていく中での 3 つの段階を表している。ローランが具現するのは、戦いを絶対的なものとする戦士である。トリスタンもまた戦士であるが、快楽に身を委ねることで自らを危険にさらしている。トリスタンによって、英雄の挑む探索の中に女性が導き入れられる。ペルスヴァルもまた比類なき戦士であり、「グラアル」との出会いを介して聖なるものとの合一を願うようになる。したがってすべては、戦士（神話学者デュメジルの分類では第 2 機能＝戦闘性を表す人物）が己の力を別の 2 つの領域へ伸ばそうと努めるかのごとくに進んでいく。その 2 つの領域とは、快楽（第 3 機能）と聖なるもの（第 1 機能）であり、理屈の上では戦士に^{イマジネール}抗うはずの領域である。ヨーロッパの想像世界では、英雄は自然に逆らってこの 2 つの統合を試みようとし、挫折というかたちで罰せられている。

英雄は常に神になることを夢見ている³⁶⁾。運命的な呪いが過酷にも英雄をうかがっているのはそのためである。ベートーヴェンをこうしたヨーロッパの英雄的^{ヒロイズム}精神の絶対的なモデルとすることで、ロマン・ロラン〔フランスの小説家、1866年～1944年〕は「苦しみによる喜び（デュルヒ・ライデン・フロイデ）」という有名な句を、墓碑銘のかたちで彼に与えた。このように本論から輪郭が明らかになったヨーロッパの英雄は、果たして普遍的な表象なのだろうか？ それとも逆にヨーロッパ文化に特有の存在なのだろうか？ 中世アジアの文学作品から類例を探して比較検討を行えば、この難問への答えとなる材料がいくつか見つかるはずである。

36) Ph. Sellier, *Le mythe du héros ou le désir d'être dieu*, Paris, Bordas, 1970.